

# 自然観察会ははじめの一步

地域自然観察会活動検討会

代表 本多 孝

## はじめに

県や市などの主催でなく、自分が住む地域で、自分が主催して行う「地域の小さな自然観察会」が最近いろいろなところで始められてきています。開催している指導者が、他の観察会との情報交換や自分たちの活動を見直しその意義や位置づけを考えてみようと「地域自然観察会活動検討会」を結成しました。

この「地域自然観察会活動検討会」は、埼玉、東京、山梨、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、徳島、香川の10都府県から15団体、21名が参加しました。11月に全国の「地域の小さな観察会」の代表や、これから始めてみたい自然観察指導員を集めてこの「地域の小さな自然観察会」について研修検討会を開催することを目的に2回の交流検討会と、今年1月にまとめの交流検討会を計画し、全4回の活動計画を立てました。

6月3・4日、大阪豊中市で1回目の交流会を10名の参加で行いました。この中で、全国の自然観察指導員のみなさんに呼びかけられるよう財団法人日本自然保護協会に協力をお願いし、交流検討会に参加していただくことにしました。この中で、研修検討会での課題整理を議論し、「地域の小さな自然観察会」が果たす役割、自然保護との関わりをまとめ、さらに連絡会のあり方についても議論しました。財団法人日本自然保護協会の協力で、観察会の現状をアンケート調査することを決めました。

8月19日、新大阪に15名の参加で2回目の交流会を行いました。この中では、研修会のプログラムや役割分担などを決めました。

11月11・12日には、服部緑地ユースで54名（埼玉、東京、神奈川、愛知、長野、三重、滋賀、京都、奈良、大阪、兵庫、徳島、香川）が参加し、講義、実践報告、分科会（1. 初めて始めてみようという指導員、2. テーマ探し、3. 自然保護、4. ネットワーク）を行い交流・検討しました。活発な討論がされ、有意義な研修検討会になりました。この研修検討会は「自然観察会ははじめの一步」とネーミ

ングし、全国の参加を募るため財団法人日本自然保護協会の主催にいただきました。

96年1月15日、新大阪に11名の参加でこれらの一連の活動をまとめ、報告書を作成することにしました。

これらの一連の活動を通じ「地域の小さな観察会」の活動の役割や意義をまとめ上げることができ、これからの地域観察会活動の指針を明らかにすることができました。また、活動理論の体系化が図られました。

多くの地域観察会の指導者のみなさんに何度も大阪に集まっていただきました事と、この活動に協力くださいました財団法人日本自然保護協会、そして、助成金を提供してくださいました、タカラハーモニーファンドに感謝いたします。

1996年5月1日 地域自然観察会活動検討会 代表 本多 孝 (みのお山自然の会)

## 「自然観察会ははじめの一步」報告書発行にあたって

自然観察指導員講習会の中で、参加者は「自然観察は、『いつでも、どこでも、だれとでも』できます。この講習会がおわったら、家族や近所の子供たちをさそって、さっそく自然観察会をはじめてみましょう」という言葉を講師から聞きます。しかし、自然観察指導員の登録証と腕章を手にし、「さてどうやって自然観察会をはじめたらよいのだろうか」と考えると、「もっと勉強してからでないといけないのでは」とか「今は忙しいからもっと暇になってからにしよう」などという気持ちが出てきて、結局のところ登録証や腕章はタンスの肥やしになってしまう例もあるようです。



▲観察会をはじめてみたい人の分科会

そんなとき、身近な場所に自然観察指導員の仲間（自然観察指導員の連絡会は現在ほとんどの都道府県に生まれている）がいれば、その自然観察会に加えてもらって、最初は受付や交通安全係をしながら先輩指導員のやり方を学ぶということもできるでしょう。また、すでに公民館、PTA、子供会などの地域活動とかかわりをもっていった人は、「私、自然観察指導員になったんです」といえば、「今度の行事で講師をしてもらえませんか」とお座敷がかかることもあるでしょう。しかし、そんなつながりをもっていない人は、どうしたら「自然観察会のはじめの一歩」がふみだせるのでしょうか。それが本書の第一の課題です。

ところで、「自然観察会のはじめの一歩」には、もう一つの意味が込められています。最近の傾向として、自然観察指導員講習会を受けた後、「地域の小さな自然観察会」を始める人が増えています。日本自然保護協会が、自然観察指導員の養成を始めた頃（昭和52年）は、自然観察会といっても植物趣味の会や昆虫採集会という形の観察会が多く、「動植物の名前にこだわらず、採集を目的としない」自然観察会が、新鮮なおどろきをもって迎えられました。自然観察会という名前を、理科教育や採集教育から切り離し、誰もが楽しめるものにしたという点で、自然観察指導員講習会の果たした役割は非常に大きなものであったといえるでしょう。一方で、都市環境の悪化にともなう自然志向の高まりを受けて、アウトドア活動が一つのブームとなり、行政や企業が催す自然観察会が盛況を見せています。そしてこのような自然観察会においてさえ、「名前にこだわらず、採集を目的としない」は、あたりまえになってきています。そこで今、自然観察指導員の自然観察会は、何を新しい目標とすべきかが問われています。おそらくその回答の一つが、「地域の小さな自然観察会」であるといえるでしょう。（つい



▲観察水のテーマ探し分科会

でながら、もう一つの回答は、「全国一斉自然度調べ」に代表されるような、「調べる自然観察会」ではないかと思います、「調べる自然観察会」は、これまでの「自然に親しむ」という方法を基礎として、「自然を知る」、「自然を守る」という流れにつなげるものだからです)

「地域の小さな自然観察会」は、文字どおり身近なフィールドで、身近な人を対象として、比較的少人数で継続して行う自然観察会ですが、とくに決まりきった形があるわけではありません。むしろ、自然観察指導員講習会を受講した人たちが、自分のできる範囲で自然観察会をはじめたらこんな形になったというようなものかもしれません。ところが、そこまで深く考えずに始めてみたら、「地域の小さな自然観察会」であるが故のよさというのが見えてきました。

まず、継続的に小さな観察会を開くことにより、地域の自然がよく見えてくる、参加した人たちの顔がよく見えてくるというよさがあります。参加者と指導者という垣根が取り払われ、「参加者が主役の観察会」ができる。小さな観察会なので、組織運営よりも観察会を開くことにエネルギーを集中できる、というよさもあります。また、身近な場所をたくさんの目で見続けることにより、フィールドに愛着を持った「地域の自然の番人」を増やすことにつながる、などいろいろな可能性が見えてきました。そこで、日本自然保護協会では、1995年11月に大阪市服部緑地ユースホステルにおいて、「自然観察会はじめの一步」と題して、「地域の小さな自然観察会」をはじめのための研修会を開催しました。

研修会を開催するにあたって、日本自然保護協会では、「自然保護 (95年7月号)」に同封した葉書で、「地域の小さな自然観察会」に関するアンケートをとり、会員や自然観察指導員が、どのように自然観察会にかかわっているかを尋ねまし

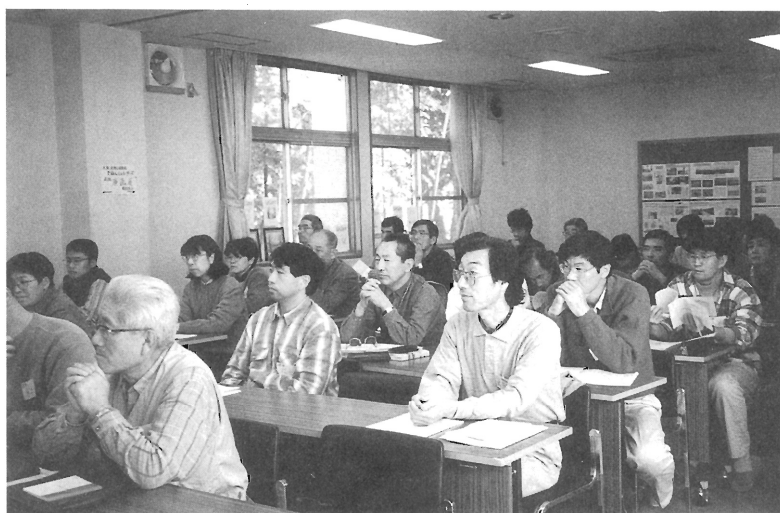


▲ネットワークづくり分科会

た。また同時に、自然観察指導員連絡会にあててアンケートをとり、日本自然保護協会がすすめている、「地域の小さな自然観察会」の運動に関する意見を広く集めました。

葉書アンケートでわかったことは、回答者の多くが、すでに指導者として自然観察会にかかわっており、その参加の方法も、民間団体（自然保護団体等）の自然観察会、行政（自然公園・公民館等）の自然観察会、自然観察指導員連絡会の自然観察会などさまざまであり、自分の観察会を始めているという事例も数多く寄せられました。また、自然観察会のタイプによって、開催場所や参加者層が微妙に異なっており、行政・民間団体・連絡会の自然観察会が、県下あるいは市内全域で不特定の参加者を対象とした観察会を開いている場合が多いのに対して、自分の観察会では市内の特定の場所で、小学生とその親など、継続した参加者を対象に観察会を開いている例が多いこともわかりました。このことから、「地域の小さな自然観察会」は、従来の自然観察会とは対立する概念ではなく、十分にすみわけ可能な新しい生態的地位を占める観察会、新しい可能性を秘めた観察会であるということがわかってきました。また、これから自分の観察会を始めたいという人は、参加者の募集方法など観察会の運営について、すでに観察会を始めている人は、観察会のテーマや他の地域ではどうしているのかを知りたがっていることもわかり、研修会の内容を検討するためたいへん参考になりました。

一方、自然観察指導員連絡会に対するアンケートでは、連絡会が都道府県ごとの事情にあわせて、単独の観察会実施団体であったり、地域支部制をとっていたり、観察会の連絡組織であったりと、さまざまな形態をとっているため、「地域の小さな自然観察会」を推進する意義についても、さまざまな回答が寄せられま



▲全体会

した。「日本自然保護協会がとりくむ必要性はない」と考える連絡会から、「地域支部制を推進する中で協力して行きたい」とする連絡会、「すでに地域の小さな自然観察会の連合体という形になっている」という連絡会までさまざまな意見が出て、「地域の小さな自然観察会」の位置づけを明確にする必要性を感じました。「地域の小さな自然観察会」は、連絡会の存在と矛盾するものではありません。自分の観察会を始めようとする指導員は連絡会の応援が欲しいし、自分の観察会を開ける実力を持った指導員は連絡会にとっても大切であるといった意味で、地域に根ざした自然観察会がふえるにつれ、連絡会の役割はますます大きなものになってくるからです。

このようなアンケートの内容をもとに、「自然観察会はじめの一步」研修会を準備したところ、定員をうわまわる参加希望があり、会場となった服部緑地ユースホステルに全員（54人）が参加できるよう交渉し、ようやく開催にこぎつけました。参加者は、近畿・中国・四国地方の方が中心でしたが、関東や中部地方からの参加者もありました。参加者への事前アンケートでは、以前から観察会にたずさわっている人が4割、最近観察会をはじめたばかりの人が2割、まだ観察会をはじめていない人が4割という比率でした。そこで、研修会の前半は、まだ観察会をはじめていない人に焦点をあて、基調講演・事例報告・全体討論などを通じて、「どうしたらはじめの一步がふみだせるか」を考え、後半は分科会形式で、観察会をはじめた人が抱える悩みを話し合う、という研修会を組み立てました。

「自然観察会はじめの一步」という言葉に込められた2つの意味あいのうち、「自然観察指導員のはじめの一步」という意味では、何人かの参加者が意を強くして帰られ、「その後自然観察会を始めたということをうかがいました。しかし、



▲自然保護分科会

「地域の小さな自然観察会のはじめの一步」という意味では、基調講演・事例報告などにさまざまにヒントがあったにもかかわらず、最後まで共通のイメージを作れなかったという思いが残りました。「地域の小さな自然観察会」の流れは今ようやく小川となって流れ始めたばかりであり、組織的な観察会で指導している人から、まったく自然観察会の経験がない人までが、新しい観察会について共通のイメージをつくりながら議論するのは少し無理があったのかもしれません。

そこで、研修会に参加したメンバーが集まり、研修会の基調講演、事例報告をもとに、議論が不十分だった点を補足して、「自然観察会のはじめの一步」のもう一つの意味あいである、「地域の小さな自然観察会を始めるにはどうしたらよいか」、という問いにも答えられる報告書をつくることになりました。研修会の録音テープが下敷きになってはいますが、話し言葉そのままでは伝わりにくい点は、発表者に大幅に加筆修正をお願いしました。また、全体討論、分科会などで話された内容は、Q & Aの形で収録しました。本報告書がきっかけとなり、全国に「小さな自然観察会」の輪が広がり、どこの町にも自然観察指導員による自然観察会が生まれることを期待します。

最後に、この研修会開催にあたって、関西周辺の自然観察指導員の有志による実行委員会の皆さんに、会場の準備から、事後のテープおこしまで、たいへんお世話になりましたことを御礼申し上げます。また、本書の発行には、地域自然観察会検討会が「タカラハーモニーファンド」からいただいた助成金の一部を使わせていただきましたことをご報告申し上げます。

1996年4月1日

(財)日本自然保護協会 普及部長 吉田正人